

## 〈書 評〉

カルロス・フエンテス著  
『アルテミオ・クルスの死』

(木村榮一訳，新潮社，1985年)

昨年のメキシコでは独立175年、革命75年を祝う行事が各地で催され、ドローレスの鐘が全国を巡ったという。また、7月の選挙では苦戦との下馬評であったPRIが圧倒的な勝利をおさめ、9月には首都を大地震が揺さぶったが、このように、いわゆる出来事の多かった年の5月に2冊の本が書店に平積みされた。1冊はベスト・セラーになったAlan Ridingのメキシコ(人)論 *Vecinos Distantes* (*Distant Neighbors*, 1984の西訳)であり、もう1冊は小説部門では最も売れたカルロス・フエンテスの中篇、革命最中のメキシコで消息を絶ったアンブローズ・ビアスの最期を革命との絡みで描いた『ヤンキー爺さん』。ほぼ同じ頃、わが国では、十数年前から企画されていた本書『アルテミオ・クルスの死』の翻訳が、ようやくにして、出版されるにいたった。「わたしはメキシコ市の中心に架空のアパートを所有している。屋上階にはアルテミオ・クルスが、地階にはアウラが住んでいる。そしてこのビルは雨の神チャック・モールが住む不安定な泥の中に沈みつつある」とフエンテスは語るが、そのフエンテスのメキシコを考えるうえで重要な人物の登場する作品がここに邦訳ですべて読みうることにもなったのである。

瀕死の老人が横たわっている、わずかながら機能する器官は目と耳と口という、いわば意識だけの存在として、彼は、「いま現在のことを忘れるには、昨日したことを考えるのがいちばん」(p. 9)と過去を振り返りはじめるが、それが継起となって、やがて、病からくる昏睡と覚醒を繰り返しつつ、12のエピソードを思いだす。『アルテミオ・クルスの死』は1959年4月10日、死

すべき運命にあるこの男、つまり、社会の底辺から身を起し頂点に上りつめたアルテミオ・クルスが71年という歳月の中で二者択一を迫られた、人生の転機ともいべき12日を、1人称・2人称・3人称という三つの人称と、それぞれの人称に主に現在形・未来形・過去形という三つの時制を用いて描いたフェンテスの三作目の長篇小説である。この作品がラテンアメリカ文学を代表する傑作である所以は、いうまでもなく、語られる内容とそれを支える語りの形式の見事な調和にある。

物語を支える三つの人称、すなわち三人の語り手は誰か、その三者の関係はいかなるものか、そして、それぞれの語り手が用いる三つの時制はいかなる役割を担っているのか、こうした問には物語全篇に埋め込まれた〈鏡〉が答えてくれる。ここで、それぞれの人称の部分にあるこの〈鏡〉をいくつか取り出してみよう。

1人称で語られる部分では、

「不揃いな四角形の鏡に顔の一部が映っている老人、これがわしだ」(p. 6)

「アルテミオ・クルスは病気ではない。べつの人間だ。ベッドの前の鏡に映っているもうひとりの男だ。アルテミオ・クルス。彼の双児の兄弟だ。アルテミオ・クルスは病気にかかっている。もうひとりのアルテミオ・クルスが。(中略)双児の兄弟。アルテミオ・クルス。自分の分身」(pp. 9-10)

「いつだったか鏡を見ていて年を取ったものだと感じたことがある」(p. 158)

2人称の部分、

「縮れた白髪のとおり、オリーブ色の顔がテーブルのガラスにゴツンとぶつかり、お前はまたしてもそこに映っている病気にかかった双児の兄弟の顔を見るだろう」(pp. 13-14)

「敵をすべて倒せば、残る相手は自分しかいなくなるだろう。お前の敵が鏡から飛び出して、最後の戦いを挑んでくるだろう」(pp. 98-99)

「いつの日か、お前は目を覚まして——その時こそわしが勝つのだ——鏡をのぞき込み、過去においてなにかを忘れてきたことに思い当たるだろう」  
(p. 165)

「お前は選択するだろう、生き延びるために選ぶだろう、無数の鏡の中から一枚の鏡を選びとるだろう、そのたった一枚の鏡は他の鏡を黒い影で覆い隠し、もはや過去にもどることのできないお前の姿を映し出すだろう、他の鏡が選びとるべき無数の道をふたたび映し出す前に、それらをすべて破壊するだろう」 (p. 235)

3人称の部分、

「マデーロ街に向かって取付けられたもう一枚の鏡にも自分と同じような男が映っていた」 (p. 20)

「その朝、彼は寝室に取付けてある長円形の大きな鏡の前で服を着たが、(中略)目の前には腕の太い、がっしりした身体つきの男が映っていた」 (p. 141)

「裏に水銀を塗った四角い鏡には、額が広く、頬骨が突き出し、見るからに精力的な感じのする緑色の目の男の顔が映っていた」 (p. 166)

「目を開けると、頬骨が飛び出し、唇の色が悪く、目が充血した老人の顔が映っていた。鏡の向うで顔をしかめているのはまぎれもなく自分だった」  
(p. 180)

物語の1人称の部分語るのは〈わし〉、つまり、臨終の床にあるアルテミオであり、死にいたる12時間という時を、まさしく死へと直進させるために現在形が用いられている。そして、この〈わし〉が見つめる「ベッドの前に映っているもう一人の男」「双児の兄弟」こそ、〈わし〉に向かって〈お前〉と語りかける2人称の部分の語り手、〈わし〉の「最後の敵」である「分身」なのである。選びとられなかった鏡、破壊された鏡に映るはずであったアルテミオ、〈わし〉が二者択一を迫られたときに切り捨てられていったアルテミオの総体であるともいえる。絶えず無意識下に沈み、可能性として存在することになるこのアルテミオはしたがって未来形で描かれる。また、1959年4

月10日、鏡を境にして見つめあう〈わし〉と〈わし〉を〈お前〉と呼ぶ2人称の部分の語り手(以後、この語り手を〈お前〉と表記する)が思いだす〈彼〉(以後、3人称の部分の語り手を〈彼〉と表記する)は過去おいて〈わし〉にも〈お前〉にもなりえた存在である。つまり、〈わし〉は〈彼〉の肯定の、そして〈お前〉は否定の結果として存在している。誰も事実としての過去を訂正することはできない。3人称の部分が過去形で書かれ、物語中で他の人称の干渉を受けることがないのはこのためである。ところが、この〈彼〉は〈わし〉か〈お前〉が想起しないかぎり、存在しえない。三者がつくりあげているこの、いわゆる三角関係は肉体と意識に分離している〈わし〉の生体の機能の停止で破綻する。

「わしには分からん……彼がわしで……お前が彼で……わしが三人の人間なのかどうか……それが分からん……お前は……お前はわしの中にいて、わしといっしょに死んでゆく……喋っていたのは……わしとお前と彼の三人だ……わしは……彼はわしの中にいて、わしといっしょに死ぬだろう」(p. 355)

「かつて彼であったわしは、これからお前になるだろう……クリスタルのガラスの底で、鏡の裏で、お前と彼の上と下でわしは聞く……(中略)お前はわしの中にいた、わしはお前といっしょに死ぬだろう……三人……わしたちは死ぬだろう……お前は……死ぬ……お前は死んだ……わしは死ぬだろう」(p. 356)

〈わし〉が目覚めた場面で始まった『アルテミオ・クルスの死』の物語がなぜ〈お前〉の死で終わるのか。まず、記憶として想起される〈彼〉が、想起する主体である〈わし〉によって思いだされなくなったとき消滅するのは当然といえる。それでは、なぜ〈わし〉の死で終わらないのか。それは〈わし〉と〈お前〉のあいだにある時間のズレによる。誤って人を射殺したあとコクーヤの山を越えるアルテミオ少年は星を見るが、その星の光は、「お前が眺め、その目で洗礼をほどこしてやろうとしている光は過去の光」(P. 352)である。〈わし〉(現在)は鏡の裏にいる〈お前〉(未来)からみれば、まさしく

「過去の光」にほかならない。

ところで、〈彼〉が語る12のエピソードはどのようなものか。内的時間の中にある記憶の常で無秩序に脳裏に浮かびあがる、そうした12のエピソードを、アルテミオの誕生から死へと外的時間の流れにそって並べかえてみよう(ただし、日付の前の数字はアルテミオが思いだす順序をしめす)。

- ⑫1889年4月9日 アルテミオの誕生。
- ⑪1903年1月18日 コクーヤでの少年時代、出生の秘密。
- ③1913年12月4日 オブレゴン派の中尉として戦う。レヒーナとの恋。
- ⑦1915年10月22日 オブレゴン派の大尉として戦い、ビーリャ派に捕縛される。牢中でカランサ派のゴンサーロと出会う。
- ②1919年5月20日 ゴンサーロの父であるプエブラの大農園主ガマリエル・ベルナルを訪問、その娘カタリーナと結婚へ。
- ④1924年6月3日 カタリーナとの破局、国会議員選への出馬。
- ⑤1927年11月23日 憲法を修正し再選を狙うオブレゴン派からカリェス派へ鞍替え。
- ⑧1939年8月12日 ラウラのアパートでの一日。
- ⑨1939年2月3日 スペイン内乱と息子ロレンソの死。
- ①1941年7月6日 カタリーナと娘テレサの買い物、アメリカ人との裏取引。
- ⑥1947年9月11日 アカプルコでのリアとの一日。
- ⑩1955年12月31日 コヨアカンの屋敷での迎春パーティ。

無作為につけられているようなこれらの日付も、メキシコ史と照合されると、意味をおびてくる。コクーヤの山を越え、「山のむこうで待ち受けている未知の、新しい運命の奴隷となる」(p. 349)までアルテミオにとって選択の余地がなかった⑫⑪のポルフィリオ期を別にすれば、エピソードが変わるたびにメキシコを治める統領、あるいは大統領が代わっているのが分かる。革命、反革命、その反革命に対する戦いから権力闘争へと変わっていった③⑦のあと、②カランサ、④オブレゴン、⑤カリェス、⑧アルバラード・ロドリゲス、

⑨カルデナス、⑩アビラ・カマチョ、⑥ミゲル・アレマン、⑩ルイス・コルティネス、そして臨終の床のある現在はロペス・マテオスというように、「革命が終わると、プエブラの農民に短期高利で金を貸し、将来性を見込んでプエブラ市近郊の土地を買い占めた。また、歴代大統領に近付き、彼らの口ききでメキシコ市内の国有地を取得し、さらに首都の新聞を買収、鉱山株を買い占めた。また、メキシコとアメリカの合弁会社を設立し、法の目をごまかすために自分がその社長におさまった。北アメリカの投資家の信用をうまく勝ちとって、シカゴおよびニューヨークとメキシコ政府の仲介役をつとめる一方、株価をたくみに操作して好きな時に売り買いついて暴利をむさぼった。アレマン大統領と手を組んだ時は、笑いが止まらないほど良かった。政府が内陸部の都市で新たに土地の分譲を計画し、農民から共有地を接収したという情報を入手すると、さっそくその土地を買収したし、森林伐採権も手に入れた」(p. 13) アルテミオの成り上っていく過程を日付は示唆している。そして、この過程は他人を犠牲にするとともに、国を、革命を裏切っていく過程、つまり、ラ・チンガーダの子として生まれ、チンガールすることでグラン・チンゴンとなる過程でもある。それはまた、チンガールされることで誕生し、ラ・チンガーダの子がはびこるメキシコをも象徴するものである。『アルテミオ・クルスの死』におけるメキシコ批判は主人公がメキシコそのものとして描かれているがゆえにいっそう辛辣さを増すことになる。

メキシコが生まれ変わりえたかもしれない唯一の機会、メキシコ人を「ひとり残らず結びあわせている」「ラ・チンガーダの鎖」(p. 162)を断ち切りえたかもしれない機会が1910年に始まる革命であった。だが、「教養のある連中は悲しいことに自分の利益を守ることに狂奔して、革命を中途半端な形で終わらせて」(p. 218)しまう。古い体制を崩す「革命の混乱の中から誕生してきた新しい世界の名」、「老人にとって変わるべくやってきた新しい世界の人間たちの名」(p.p. 51-52)であるアルテミオ・クルスのもたらした新しい世界は、革命の動乱が鎮静するにつれて、ふたたび新たな階級社会をつくりだし、固定化していつてしまう。こうした経緯を辿った革命に対する失望感から、

多くの知識人がメキシコ(人)の本質を考察しはじめる。その成果の一つがオクタビオ・パスの『孤独の迷宮』(1950)であり、同書に啓発されてフェンテスは『大気澄みわたる地』(1958)を発表する。フェンテスの小説世界を知ろうと極めて重要なこの長篇の第三部にハイメ・セバーリョスという人物が登場するが、ハイメは次作『良心』(1959)の主人公となり、さらに『アルテミオ・クルスの死』(1962)にも登場して三作を緊密に結びつける。フェンテス自身、ハイメのようにもなりえたと述懐するが、そのハイメは『アルテミオ・クルスの死』ではコヨアカンの屋敷での迎春パーティでアルテミオと言葉をかわす。設定上フェンテスと同世代のハイメをアルテミオは「言ってみれば、あんたは宴の後にやってきたんだ、それなら残飯でもあさるより仕方あるまい」(p.304)とたしなめる。だが、このハイメとスペイン内乱で死んだロレンソがオーバーラップする。コクレーヤの山を越えて新しい世界に足を踏み入れたアルテミオ、山越えの途中で機銃掃射をうけて死んだ、それゆえに革命の挫折を象徴するロレンソ、アルテミオという山の麓に立つハイメ、三者の織りなすこのパーティの場面は見事にメキシコ社会を現出する。そして、アルテミオの前で屈伏せざるをえないハイメの姿を通して「宴のあとにやってきた」フェンテスの革命の挫折に対する怒りが露になる。

フェンテスはこの『アルテミオ・クルスの死』以後も執拗にメキシコ(人)を見つめつづけることになるが、それはメキシコ・シティで生まれた直後、父親の仕事の都合でパナマに渡ったのを皮切りに南米諸国の首都を転々とし、やがてワシントンで英語世界に呑みこまれそうになるようなアイデンティティの危機を迎えたことに起因する。フェンテスのメキシコ(人)のアイデンティティ探しは、逆に、根無し草的な存在として育ったフェンテスが自らの根をメキシコにおろそうとする、つまり、メキシコ人であろうとするこだわりの証左ともいえよう。

だが、『大気澄みわたる地』『アルテミオ・クルスの死』と鋭く、激烈に革命を批判したフェンテスも、新作『ヤンキー爺さん』では、野谷文昭氏が指摘するように(「新潮」1986年2月号)、まるで革命を単なる遠景として用い

ているかのような感があり、批判の切っ先も鈍い。それが、ホセ・レブエルタス、アグスティン・ヤニェス、ルイス・スポーツ、そしてこの1月にはファン・ルルフォと、メキシコ現代文学の幕を上げた作家たちが次々と消えていくいま、かつては父親殺しの世代であったフエンテスが孤峰のごとき存在として殺される世代にはいつているせいなのかどうか。その答えは、かつてフエンテスはエミリアーノ・サパータを主人公にした小説を書きたいと述べたこともあり、いまのところ今後の作品を待つしかない。

わが国におけるラテンアメリカ文学がポスト・ブームに入りつつあるとき、まさしく「宴のあと」に本書『アルテミオ・クルスの死』が翻訳出版されたわけだが、欧米におけるラテンアメリカ文学のブームを演出しその旗頭となったのがフエンテスであり、そのフエンテス自身とラテンアメリカ文学の水準の高さを認識させ、他のラテンアメリカの作家にも多大の影響を与えたのが本書であることを考えれば、ノーベル賞授賞という一つの事件を体験したガルシア＝マルケスに対する評価と比べて、わが国におけるフエンテス評価はあまりにも低いといわざるを得ない。本書の紹介が後手になったのが、その一因であろう。しかし、翻訳紹介のタイミングを悪さを嘆いても仕方あるまい。極めて流麗に翻訳された本書の出版を機に、フエンテスに対する正当な評価がなされることを期待したい。

安藤哲行 (摂南大学)